

美術科内容構成の創出とその内容に基づく授業実践

— 「造形要素としての『線』」「抽象絵画の成立」授業を例に —

新井 知生

Tomoo ARAI

Creation of Teaching Contents of Art and the Teaching Practice based on the Contents
— Taking the Cases of “ ‘Line’ as the Plastic Elements” and “Formation of Abstract Painting” —

1. はじめに

筆者は自身の教科内容学研究の成果を、拙著『『平面授業構成研究』について－教科内容学研究の動向を踏まえて－』¹、「『教科内容学』研究の成果と課題－教員養成カリキュラムにおける教科専門授業の在り方を中心に－」²等で発表してきた。また平成28年7月からは、日本教科内容学会のプロジェクト研究「各科教科内容の体系性の研究（5年計画）」の教科委員（美術）として招聘され（のちに学会員となる）、教科内容構成の体系化－全教科を俯瞰した体系性の構築－に向けて研究、発表を続けている。

本稿では、これらの研究の現在までの成果を基に、美術科における内容構成の原理・構造を示し、それによって導き出される内容構成授業を、筆者が実践している授業を例にとり紹介する。

筆者は美術科の中で絵画の専門教員であり、美術全体の内容構成の創出を目指してはいるが、美術の全領域が網羅できているかはまだ検証していない。この論考は特に絵画を中心とした純粋美術の実技系を想定したものであり、その実践例も絵画の授業であることを先に申し添えておく。

2. 美術の教科内容構成原理

2009年発行の「教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究」³以来、いくつかの研究プロジェクトが、教科内容学の原理と枠組みを体系的に研究し、「学」として確立する努力を続けてきた。

それらの研究において教科内容学は「各教科専門が対象としている学問や諸科学等の教科内容を、教育実践における教科内容として構成し、体系的に捉えること」⁴と策定され、その理念から実際の授業へと進めるための手続きの体系的な研究は、教科内容学研究当初の各種プロジェクト研究から、今日の日本教科内容学会の研究に引き継がれている。

その骨子は、まず各教科の本質的内容に基づいた教科観を得るために、その教科の背景にある学問が対象とする内容や構造の意味とそれを知る方法を確定し、それを「教科の認識論的定義」と呼ぶところから始まる。次に

それを基に人間形成としての教科の教育的価値を導出する原理－「教科内容の構成原理」－を作成し、そしてその導出された原理の根本内容を構造的に示す具体的内容－「構成原理の具体」－を挙げる。この手順で教科内容の基盤となる要素を示した上で、それを教科の教授項目に即して具体的な内容構成として創り上げ、シラバスを作成し授業実践する。これがその全体的なプロセスである。

ここ10年あまり、このプロセスに従い数々の教科内容学案が発表されてきた。ここでは筆者が試みている美術科の最新の教科内容原理の研究を示す。

（1）認識論的定義

認識論的定義とは、その教科が背景にもつ学問分野成立の基本原則であり、その研究を支えている本質的内容・学術的根拠のことである。

筆者は、学問の第一義的価値に依拠することがその前提となると考えている。それは各学問の専門性独自の世界の見方・掴み方を知り、それにより人間と世界の関係性をつかみ、生きていることの意味に触れることであり、それが教科の背景にある価値だと考える。⁵

この学問・芸術の意義に従い、美術が世界を把握するための表現の論理を求めると、「美術が独自に持つ形式の諸要素を、素材を使って構造化（組織化）することによって、感性的空間（平面空間・現実空間）を作ること」と言い得るであろう。この認識論的定義の根拠から、その構成要素として「対象」「要素」「構造化」「形式」「内容」を抽出⁶し、以下の認識論的定義を策定した。

美術（絵画・彫刻・映像等）は外界（世界像）や内面（内的経験）を対象として、空間・平面の媒体上に色・物質等の媒介物を用い、美術的表現要素である造形要素（線、色、量等）を構成することによって感性的に形象化し、人間感情や自然の質⁷を表現したものである。

〈デザイン・工芸等〉の領域においては、上記の定義が人間生活上の目的・機能に沿ったものとなる。⁸

（2）美術科内容構成の原理

教科内容の構成原理とは「専門的諸科学に依拠して教科の実質的内容を自律的に構成するための原理」⁹をいう。

* 島根大学学術研究院教育学系

教員養成において具体的に教科の教育的価値を創出するため、この内容構成の原理が求められる。美術の実質的内容を自立的に構成するための原理を求めるとすれば、認識論的定義を基に、美術の実態像を包括的に成立する枠組みとして、①制作の原理としての要素の構造化、②生まれる作品内容としての質、③そのための手立てが考えられる。またそれに携わる人の④知識や経験-背景はどの文化・学問にも考慮されるべきことであろう。その4点から以下のような内容構成の原理を策定した。

- ① 成立の根拠としての要素の構造化-美術独自の表現要素-造形要素(線, 色, 構成, 量など)を, 平面あるいは空間上に構造化(組織化)することによって「形式(スタイル)」が生まれる。
- ② 成立の根拠としての質-表現されたものには何らかの「外界と内面」の様相-「内容」が付与される。
- ③ 成立の根拠としての手立て-表現には素材の解釈やその用法・技術(「技能」)が求められる。
- ④ 成立の根拠としての背景-表現には作者の育った環境や歴史, 教育等の「文化」が意識・無意識のうちに反映される。

この一連の論理の帰結として、美術科の内容構成は、その要素の構造化による「形式的側面」、その表現の質としての「内容的側面」、制作の手立てとしての「技能的側面」、その背景としての「文化的側面」の4側面から構成されているという結論に至った。

(3) 美術の内容構成の具体的要素

その4側面の具体的要素は以下のとおりである。

- ① 美術の形式的側面-表現要素, 表現スタイル
表現(造形)要素-線, 面, 色, 空間, 量, 動勢, 調子等
表現スタイル-写実と抽象, 立体的と平面的, 空間と物質
- ② 美術の内容的側面-リアリティ, イメージ, 感情, 造形, 機能
リアリティ-写実的表現
イメージ-空想的表現
感情-表現主義的, 無意識的表現
造形-自律的表現, 抽象的表現-普遍的な世界像・内面像
機能-用途, 伝達(デザイン・工芸)
- ③ 美術の技能的側面-技術, 方法, 素材の解釈等
- ④ 美術の文化的側面-歴史, 批評, 地域, 環境, 美術史, 様式, 変遷, 鑑賞等

3. 美術科内容構成による授業実践(美術の4側面の具体的内容)

以上のように、教科内容学の系統的な研究から筆者が辿り着いたのは、授業内容を上記の4側面から網羅的・系統的に把握しそれを教授することである。

この4側面からの教科内容の把握によって、美術として何を教えるのかという認識の対象が明確になり、その結果として、美術専門教員が陥りがちな、教員本人の経験から持ち得た専門内容の一方向的な授業や、技法の修得を目的とする技能的側面中心の画一的な授業から脱却し、美術の本質的内容を深める授業が可能になると考える。

次にこの4側面に沿った授業実践内容の紹介に移るが、前述のように美術(制作)の内容を構成する骨組みとは、美術専門要素(造形要素)の構造化である。そして美術科の内容構成授業もそれを段階的に教授する必要があると筆者は考えている。

第一は専門性の成立のための要素研究である。一般にどの学問も専門内容を自立的に構成するための要素があり、その要素を用いた専門性の把握、つまり一般的認識から専門性の概念としての認識に変換するための授業が必要である。美術ではその特有の表現要素である造形要素そのものの研究ということになる。造形要素とは、美術という形式でのみ世界の把握が可能になるための要素であり、具体的には線, 面, 色, 空間, 量, 調子, 動勢, 構成, 構造等を言う。

第二は専門要素の構造化による内容探求である。絵画においては専門要素の構造化による作品の成立原理として、①描画の対象, 素材, 手法に関わる研究・制作, ②絵画の形式, 内容等の成立に関わる研究・制作, ③発想をもとに創造的志向を育む制作が考えられる。

筆者は第一の研究を「平面基礎概説」授業で行った上で、第二のそれぞれの研究をいくつかの授業で行っているが、本稿ではそれぞれから一つずつ(1)「造形要素としての『線』」(2)「抽象絵画の成立」授業を例に、それぞれ4側面からどのように捉えられるかを紹介する。

(1) 造形要素の研究-「線」の理解と演習制作

〈授業概要〉「雑草のデッサン」, 「人体クロッキー」演習をした上で、線の造形的表現力について以下の「形式」「内容」「技能」「文化」の4側面から把握し、感性と認識の両面から理解できるようにする

- ・「線」の形式的側面(線によって生まれる造形的な成立内容)-「量」「バランス」「動勢」「構成」「リズム」「空間」等
- ・「線」の内容的側面(線の描写性を持つ表現力によって表現される外界像や人間の内面感情, 性格等)-「リアリティ」「清潔さ」「痛々しさ」「優雅さ」「楽しさ」「大胆さ」等
- ・「線」の技法的側面(作品の形式や内容を生成する線の種類や性質)-スピード感, 強弱のニュアンス, 線の長さ, 太さ, 硬軟, 直線・曲線等
- ・「線」の文化的側面(美術的表現形式の種類とその歴史的推移)-線, 調子, 色などによる表現の違い。ジャコメッティ, マティス, エゴン・シーレ等の画家による線表現の典型例

(2) 美術専門要素の構造化による絵画の成立に関わる研究—抽象絵画の理解とコラージュ等による演習制作〈授業概要〉・造形要素の自律的表現力の理解としての色、線、空間、構成等の理解とコラージュによる抽象制作演習（「平面基礎概説」）

- ・近代絵画史研究から抽象の発生と形式（スタイル）の成立についての理解と制作演習（「絵画実習Ⅱ」）
- ・コラージュからのスタイルと絵画概念の変遷の理解とアッサンプラージュ制作演習（「美術科内容構成研究B」）
- ・アクリル絵具の特質の理解とその特質を使ったミクストメディア抽象制作演習（「平面授業内容構成研究」）

この4つの授業で段階的に学習し、抽象絵画について総合的に4側面から次の内容を把握する。

- ① 形式的側面
 - ・造形要素の自律的表現力についての理解
 - ・写実から抽象に至るスタイルの変遷についての理解
 - ・コラージュ等近代形式についての理解
- ② 内容的側面
 - ・抽象の普遍的世界像追求についての理解
 - ・内面表現と外界表現の相違についての理解
- ③ 技能的側面
 - ・素材に対する感覚的扱い
 - ・日常品の美術素材への転化とその平面的扱いについての理解
- ④ 文化的側面
 - ・近代絵画の理念の歴史的理解
 - ・理念と形式および手法の関係性についての理解

抽象理解の入り口（「平面基礎概説」）で次のような絵画内容を受講生に問うが、それらも抽象絵画に対して4側面から様々な照射をするものである。

- ① 写実から平面化・単純化への変遷から見る（美術史、表現スタイル、造形）
- ② モンドリアンの描いた数枚のリンゴの木を比較してみる（表現スタイル）
- ③ コラージュの発生からアッサンプラージュ、ボックスアート、オブジェ等形式の変遷をたどる（表現スタイル）
- ④ 音楽の成立原理や成立要素と比較する（形式）
- ⑤ 文学や音楽など他の芸術形式と比較し、相違点や類似点を探る（形式、内容）
- ⑥ 日常品（陶器、服やネクタイの柄）、あるいは日常風景（壁や道路の汚れなど）を考えてみる（造形、機能）
- ⑦ 「抽象」という言葉を調べてみる（抽象概念、形式、内容）
- ⑧ デザインの平面構成と比較してみる（造形、機能）
- ⑨ ミロやクレーの作品にある要素を書き出す（美術史、造形、表現スタイル）
- ⑩ 茫漠とした空間だけの現代抽象絵画を見る（美術史、空間）

こうした内容を多角的に検証し、抽象に対する認識と感覚的理解を得る。それぞれの授業で演習した作品例を以下に示す（写真1-4）。



(写真1) コラージュによる抽象作品制作



(写真2) 近代抽象作品のスタイル演習



(写真3) アッサンプラージュ制作演習



(写真4) マティエールによるミクストメディア制作演習

4. 授業の展開・手順

前章では、美術科内容の4側面を具体的な授業例で紹介したが、もちろんそれをただ伝えればよいのではなく、大切なのは授業の展開の中でそれらが身につくようになることである。

美術のような実技教科の教科内容授業実践の要点は、認識と感性がバランスよく身につくことと考える。感性を身につける授業とは、学習者が主体的に試行錯誤しつつ多様な表現を生成するような授業であることが求められる。そして認識の面では、形式的側面と内容的側面の関係性について思考・判断する、内容的側面に即して技能的側面を会得する、学習者が美術史を自分との結びつきで考える授業が求められると考える。

その両方を実現するためには、まず指導者が定型の作品像をイメージした授業を設定せず、多様で豊富な素材を与え、その中から学習者が発想力を高め、制作に向かうような授業を設定する必要がある。また認識の点では、学習者に発表の機会を与え、自分の制作に対して省察することを促すことが求められる。指導者はその両方を通して教科内容の4側面からの学習が身につくようすべきであると考え。そのために必要な組み立てと手順は次のとおりである。

- 条件設定（モチーフや題材）及び素材，材料の用意
 - －制作する内容に対して，多方向から研究演習できる素材，材料を用意する（指導者・学習者）
- 制作概念の基本知識の講義（必要な場合）
- 各自の制作
 - －与えられた題材と素材に対応し，知識・感覚を総合的に発揮して，独自に発想し制作を展開させる
- 省察・発表
 - －学習者が自分の制作に対し，それがどのような要素を基に，どのような手法により，どのような形式と内容が生まれたのか省察し発表する
- 批評および教科内容構成の原理に基づいた講義
 - －指導者が美術の内容構成要素の多角的な観点（4側面からの把握）から批評した上で，資料等により授業課題が有する内容構成について教授する
- 発展的制作
 - －学習した内容構成の原理を基に，素材を発展的に使い，学習した内容・形式を有した作品を制作する
- 何を学んだか
 - －自身の制作を顧みて，課題を通して美術の本質的内容について理解する

与えられた媒体と素材による実験的制作を基として，それに学習者の省察と発表に対して指導を加える。その時美術の成立要素を1. 内容 2. 形式 3. 技能 4. 文化から照射し，その後教科内容の理解のもとに再制作するわけだが，その中で学習者が発想を高めるための試作の行程（アクティブラーニングに相当する）と，それに対する省察・発表の行程を取ることが要点となる。

そのことを通して美術を感性と認識の両面から網羅的・本質的把握をし，それは同時にその題材の教科内容へと転換をも可能にする。またその題材の基本的内容が教科内容を担う核となり，授業構成できる能力を養うことができる。と考える。

5. おわりに

紙幅の関係上シラバスの紹介ができなかったが，現在，筆者は基本的にはほぼすべての授業を，この内容構成の考えに沿った形でやっている。

島根大学では独自の教科内容研究を基に，他大学に先駆け2007年より「内容構成研究」授業を導入し，実践してきた。筆者も「平面授業構成研究」で専門内容を現場の授業を結びつける授業を試みてきた。その内容は，教科書で扱われている美術授業教材の専門内容を，教科内容として相対化して講義し演習することで，授業教材の美術上の価値や意義について把握させ，最終的には授業教材の内容を，専門性の裏付けを持つことにより理解することにある。

3年前この内容を論文に著した際，反省点として「教科書と専門内容の結び付け方が短絡的であり，また硬直した専門内容に頼っているように感じる。」¹⁰と述べている。その反省を踏まえ，本稿で見えてきたような教科内容構成授業では，「教科内容構成の原理」を主軸とすることで，自らの専門内容への拘りから脱却し，また単に専門内容を授業教材の裏付けとして教授するのではなく，感性を基とし段階的に教科題材の本質に迫る授業に近づいたのではないかと感じている。

〔註〕

- 1 大学美術教育学会「美術教育学研究」第47号 2015年3月刊
- 2 島根大学教育学部紀要第49巻 平成27年12月3月刊
- 3 西園芳信・増井三夫編著，2009，風間書房
- 4 「教科内容学の研究の歴史」，第2回日本教科内容学会プロジェクト研究資料，2017.3.2
- 5 美術には純粹意義からなるものと，デザイン・工芸のように用途，機能を目的としたものがあり，統一的には捉えられないが，本稿では美術科の根源にあるものとして第一義的意義を基に定義を導出した。
- 6 筆者は当初美術特有の成立構造からこの定義を導き出したが，日本教科内容学会のプロジェクト研究において，各教科を貫く体系性の構築のための認識論的定義が，この5要素の組み立てで成立するのではないかとして研究を進め，第5回日本教科内容学会（2018.6.30-7.1）では，各教科が仮説として同構造の認識論的定義を発表した。
- 7 「質」とは一般的には「内容や価値。物がそれとして存在する在り方」の意だが，ここでは芸術特有の経験として，自然科学や人文科学で追及される真理，真実とは別の，表現を通して世界の在り様に触れる体験を指す。
- 8 第5回日本教科内容学会シンポジウム発表資料，2018.7.1
- 9 下里俊行「社会科の内容構成の原理」第1回日本教科内容学会プロジェクト研究会資料2016.12.3。
- 10 「『平面授業構成研究』について－教科内容学研究の動向を踏まえて－」前掲書，P.38，2015.3